

石版東京圖繪

永井龍男



石版 東京圖繪

水井龍男





石版東京図絵

©一九六七

定価 六五〇円

昭和四十二年十二月一日初版印刷
昭和四十二年十二月初版発行

著者 永井龍男

版刻者 川上澄生

発行者 山越 豊

印刷所 精興社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六二) 五九二二

振替 東京三四

石^{せき}
版^{ばん}
東^{とう}
京^{きやう}
図^ず
絵^え

振り出し

もうずいぶん長い間、「明治少年懷古」という本を私は机辺から離れたことがない。

気がふさいだり、仕事がうまく運ばないような時、必ずといってよいほど、この本をひろげている。

調べることがあって、参考書をあれこれ引き出し、仕事部屋が乱れてしまった後など、他の本にまぎれてどこかへ行ってしまうこともある。当座はそれなり忘れているが、ふと思ひ出して捜しにかかり、そのために半日つぶしてしまうようなこともあった。

表紙のカバーは木版画で、背広にネクタイネクタイ縞しまズボン、頭髪を二つに分けた背の低い先生が、屑籠かじ兼用の踏台にのり、灯を入れた洋灯ランツを天井につるそうとしている図が描かれ、「あかりをつけて」と、「夜学をはじめよう」という一行ずつの文字が、先生の左右に肉太に彫り出され、さら

に左端に、「明治少年懷古」と、如何にも木版らしい題字が、大きく縦一杯に刷り込んである。

先生がささげた洋灯ランツのほやの、ほの黄色さのほかは、一面に朱をぼかしてあるので、昔の夜の感じが本の外にまでただよう。四六判百二十頁ページばかりの薄い本である。

「冬の夜更けに汽車の遠い汽笛の音をきくと、雪が降っているな、と思うのである。そして時々ほんとは雪が降っていることがある。そしてまた、なんだか父母と一しょに成田の不動様へおまいりに行ったことがあるなと思うのである。そのくせ私には、成田山の記憶なぞさらにないのである。

また時々、耳の中にラッパの音がきこえてくることがある。これは子供の時分にきいた、青山墓地をへだてて聞えてくる三聯隊れんたいのラッパの音なのである。雨の降っている時など、どこかからはんとはきこえるはずのない野州娑川村の寓居にある僕の耳に、三聯隊のラッパの音がよみがえってくるのである。かれこれ二昔も前のこと、カナダのヴィクトリアという町に、知人の居候をしていた時にも、三聯隊のラッパの音をきいたことがあった。

ラッパは、こういうのである。

兵隊さんも軍曹さんも、皆起きろ

起きないと大将さんに、叱られるぞ

床とって　しょんべんして寝え

床とって　しょんべんして寝え」(「汽車の音・喇叭ラッパの音」)

奥付には昭和十九年発行となっている。私がこの本を入手したのはその後数年してからに違いないが、それ以来私の耳にも、「兵隊屋敷」の消灯ラッパの音が、よみがえってきた。私に聞えるのは、麻布三聯隊ではなく九段の坂の上の方からである。

いまの九段坂は削ったので、昔はとても急であった。坂下には、車の後押しあとをして駄賃をせびる立ちん坊が、いつも二三人日向ぼっこひなたをしていたくらいである。

上り切ると、右手が招魂社の大鳥居で、道をへだてた左側に、近衛師団の入口の黒門があり、いつも番兵が立っていた。

私のラッパは、その奥の兵隊屋敷から、風に乗って聞えてくる。

考えてみると、昔は遠方の音がよく聞えたもので、神田の駿河台下で生れ、そこで育った私は、東京湾で鳴らす霧笛を、夜中に何度も聞いた記憶がある。

まっくら闇やみの中で、はじめは「ボーッ」と眠そうに鳴り、それから、

「ウイ、ウイ、ウイ」

と、ものうげに何度か繰り返すのである。そんな時に、障子だとか天井がほんのり明るんでく

ることがある。隣りの寢床の母が、煙管きせるを吸い込むのと一しよに、火皿に詰めた煙草が赤く汚さえて、部屋のうちが浮き出すのだが、父は私の十四の時に病歿したので、そんな母の仕草は父の亡ない後、もう大正に入ってからのことであろう。

「○時計片手に駅長さん○呼子吹くのも駅長さん○そこで待ってた機関手さん○汽笛一声新橋を早やわが汽車は離れたり○わっと云いたい氣がします○ああよかったという氣もち○見送りの人混みで誰かがハンカチ振っている○誰かがこっそり泣いている○だんだん遠くへ行く氣持○知らぬ他国へ行く氣持○知らない人がしゃべってる○知らない人が下りて行く○知らない人が乗ってくる○日暮についたステンションで駅夫は洋灯ランツをぶらさげて○汽車の屋根をばこつこつと歩いて洋灯を箱ごとに○屋根の穴からさげて行く○洋灯のほのおはちちらと油煙を出すのが氣にかかる。」

これは「岡蒸氣の唄」というのである。

「明治少年懷古」の著者川上澄生氏は、版画家として知られているから、その本のカバーや表紙はいうまでもなく、各頁ページに自刻のたのしい木版画が組み込まれているほか、手刷りの彩色版も数葉入っているが、画家であると同時に、川上氏は詩魂の豊かな人なので、積木遊びの汽車が、コットンコットン、眼前を走り出したように感じられる。幼年時代少年時代の心を、長い間そな

うことなく持ち続けるのは、誰にも出来る業^{わざ}ではあるまい。

奥付には、二百部限定版としてある。昭和十九年というぎりぎりの戦争末期に、こういう本が出版されたということも、当時のさし迫った世の中を知っている者には不思議というよりほかはない。

ザラ紙の手帳一冊すら買えない時に、この本は出来たのである。その発行者として、奥付に名を連ねた高崎正男という人は、たとえば埋^{うず}み火をかきたて、手を重ねるかのように、著者とともにこの本の刷上りを喜んだであろう。

日ごとに激しさを加えたあの戦火の中では、出来上った二百部の本も、古い東京を愛した人々の手に、素直に渡った訳はあるまい。げんに、私の持っている「明治少年懷古」は、戦後の古本屋の棚で見つけたものである。その大半が、焼けてしまったのではないかという想像もなりたつのである。

そう思えばなお、紺がすりの着物を着た少年を乗せて、積木の汽車の走るのが、私にはあざやかに見えてくるのである。

この「岡蒸気の唄」でみると、昔の列車の天井には、一定の穴があいていて、日暮れ時に着いた駅では、駅夫がコツコツ屋根伝いにやってきて、そこから車内へ灯のついたランプを下げたこ

とがわかる。

新橋駅からいったいどこまで、汽車は通じていたのであろうか。

「岡蒸気の唄」の少年の心は、いまの子供の心と少しも変わってはいまい。

ジェット機に乗っても、子供の心はこのように動き出すものに違いはない。ただこのように、夢をもって歌うことを、この頃の都会の少年は恥かしく思っているふしがあるかも知れない。大人達はそれを、科学的な精神といっているようだ。

川上氏はおそらく、明治二十年代の生れかと思われるが、ものごろろついでからの東京の風物を、「明治少年懷古」の一冊におさめている。明治を語る著者は多いが、少年の眼に触れ心に刻まれたままを、邪心なく書きうつし、幼なごころを生かした点では、ほかに類がないように思われる。

たとえばさらに、亡き母について記した短章から抜萃してみよう。

「母の名は小繁こしげと云った。しかしそんな名ははやらないと見えて、父は「しげ」と呼んだ。

今はもうお婆おばさんになった、母の姉の小鶴こづは僕に、「しげさんはお嫁に行く前に、何が食べたときいたら、かんかちだんごが食べたいと云ったよ」と云った。」

母の小繁さんは、明治の初年に、いまの数え方にすれば十六か七という、娘ごころの抜けない

年頃で、川上家へ嫁いだに違いない。

かんかち団子は、私もおぼえている。

片方に小振りな杵と臼を、片方に幾重ねかの小引出しを、それを天びんで肩にかついで、子供の集りそうな横丁横丁へまわってきた。

小引出しには、細かくちぎった餅と、黒蜜、それにあんやきなななどが順序よく入れてあって、道端に臼を据えると、その餅をつきはじめる。餅をつく合間に、調子をとって杵で臼の縁をたたき、かんかち、かんかちと音を聞かすところから、そのままその名がついたのであろう。

もともと、つき上げた餅を持ってきて、客寄せに杵を使って見せるのだから、団子はすぐ出来上り、黒蜜でぬらしてからきなこにまぶしたり、あんの中へころがし込んで、くしへ差したようにもおぼえている。餅米をせいろでふかすところから、やったのもあったが、およそ、そんなものであった。

一銭二銭の銅貨を握ってきた横丁の子供達、たまには裏店のおやつ時をねらった商売だから、「買食い」をいやしいものとした良家の子弟は、欲しくても手を出せない。

年頃になった小繁さんも、一度食べてみたいなあとは、長い間考えていたものに違いない。それが、嫁入りをひかえて、つい口に出たのである。

いよいよ嫁入りするときまで、そっと姉にねだったものが、かんかち団子だったということ、思わず私達の微笑をさそうけれども、微笑の後に、なにがなし切なさを感じさせるものがある。

「しげさんはお嫁に行く前に、何が食べたいときいたら、かんかちだんごが食べたいと云ったよと云った」と、それしか書いてないが、余情の籠った文章だと思う。

そういうものが、明治のはじめの結婚だったのであろう。

私はこの小説で、明治の末頃から大正の初めにかけて育った、数人の子供達を、成人まで描き上げたいと念願しているが、どれもかんかち団子の白を取り囲んで、出来上りを待ちかねているような、あるいはまた、面白おかしい杵さばきに興じながら、実はそれを買って食べる小遣すら持たない、裏店住いの子供達ばかりである。

かんかち団子のように、裏通りや横丁へ入ってくる子供相手の商売は、ほかにも沢山あった。飴屋にしんこ細工、いり立て豆屋にもんじ焼きと、数えれば切りのないほどである。

飴屋といっても、幾種類かあった。なんの曲もなく、割りばしに飴を巻いてよこすものから、頭に盤台をのせ、太鼓をたたいてくるヨカヨカ飴、深い布袋の底のぎんなんをつまませて、赤く染めたのに当ると、太いさらし飴を呉れるのがあり、しんこ細工と同じように、子供の注文に応

じて狸でも鶴でも、飴のさめないうちに素早く細工をして、食紅で色までつけたのもあった。この飴屋だけは、チャルメラ風の笛を吹いて子供を集めた。

「きんちゃん、豆だよ」

と、調子をつけて呼び、大鈴の音を手の平で半分消しながら振ってくるのは、岡持ちを肩にした煮あずき売りであった。

昼間ばかりではない。

「香ばしや、かりんとオ」と、夜が更けてから売りにきたのも覚えている。「お身の上や、判断の、恋の辻つじイうら」「淡路島、通う千鳥の、恋の辻つじイうら」と、歌うように触れてくるのもあった。「おいなり、さアん」と、すぐそこまできて、一声ごとに遠くなるのは稲荷いなりずし屋だが、正体を見たことがないだけに、寢床の中で聞いていると、狐の気配がしたりしてうす気味悪かった。秋から冬場にかけてのようない気がする。

八百屋や魚屋が、裏通りや横丁へ商売にくるのが普通だったのだから、季節季節にしたがって、種々雑多な物売りが町内を出入りした。

しじみ売りに似て、威勢のよかったのは「しこや、いわしこいわしこイ」の鰯いわし売りで、鯉こいや鮎あなを盤台のひたひた水に横にねかせて売りにくる者もあった。妊産婦のある家では、よく鯉こくをした。

いずれこの小説に出てくる少年達は、筒切りにされた鯉の頭が、パクパク口を開けたてするのを、道端にしゃがみ込んでじっと見詰めていたに違いない。

苗売り、定齋屋、金魚屋、虫売りのようなものは、東京の昔を偲ばせる風物詩として、いまでも時折り話題に上がることがあるが、これらはすべて開放的な夏の商売ばかりなのに気がつく。

茄子やきうりを、雑草でくるんで手籠に詰め、勝手口から家々の中をのぞき込んだでは、わざとらしい田舎弁で声をかける男もあった。

雑草の青さを添えたのは、畑からいできたばかりだという工夫だが、私の母などは、「のれん師」がきたといって油断をしなかった。のれん師とはどういうことか長い間あいまいだったが、今度こころみに「広辞苑」を引いてみると、「ごまかし物を売りつけるずるい商人」と、ちゃんと記してあった。

いい加減な渡り者より、裏店住いのおかみさんの方が、細かいことには抜け眼がなかった証拠であろう。

道の端に道具類をひろげて、町家の日常品の修理をする商売もいろいろあったが、いまは落語などの中に残って、わずかに伝えられているばかりである。

こうもり傘直しや、鍋釜の穴をうめる鑄かけ屋などは、わりに最近まで見かけたものだが、な

くなつてしまったのは、まず煙管きせるの羅宇屋らおであらう。

銅あかがね作りの小罐がまを、手車に乗せているのが特徴で、それで沸かした蒸氣を利用して、高い音の笛を鳴らしながらきた。その汽笛で、羅宇屋がきたとすぐわかるのである。

小罐は炭火を使って焚いたが、その焚き口の火に煙管を突っ込み、やにの解けたところで古羅宇を抜いてから仕事にかかる。

ネジをまわすと、蒸氣がほとばしって笛が鳴ったり、小罐の脇わきに湯の量を示すガラスの管が付いていたりするのが、高級な仕かけに見え、機関車を連想させたり、いろいろ珍しい小道具を、引出しから取り出しては細工をするので、いつも子供達が手車のまわりに集まる。

羅宇のすげかえを終ると、蒸氣の出口へ煙管をさし込み、湯氣を通して消毒のようなことをした。出来上った煙管は、買立ての時のようにぴかぴか光った。

「へっつい直しの呼び声を、僕はいまでも真ま似ねることが出来る。

「へっ！」と切つて、声をはり上げて、「つい——」と段々下げてきて、口早やに「直し」と、同じ音階で結ぶのである。

僕の家の台所にも、へっついが二つ並んでいた。作りつけのへっついであった。「へっつい直し」は天びんをかついで、「もっこ」の中にへな土を入れて歩いていった。

夕方の坂の上で、人の形は逆光のうちに黒々としていた。」

これも川上氏の追憶だが、坂の上の黒い人物の向うに、私には火の見やぐらと半鐘も見える。そしてまた、毎朝へっついへつの円い肩に吹きこぼれた、御飯ごはんの糊のりも思い出されてくる。東京の横丁の家々の生活が、そこからはじまるのであった。

日露戦争当時、尋常二年生だった川上さんは青山に住み、戦争ごっこをして遊んだそうだから、ちやうどその戦争中に生れた私とは、おそらく十歳ぐらいの違いがあるはずだが、

「日露戦争頃買った音楽入りの置時計は、

天に代りて不義を打つ

忠勇無双のわが兵は

歓呼の声に送られて

と、寂しい旋律をかなでるのであった。」

というような文章は、そのまま私にも通じる。

ぜんまいのゆるんだ眼醒めざめし時計のオルゴールが、一節一節間延びひきざりした調子で鳴り続けるのを、私もたびたび聞いた。軍歌とか眼醒めざめしとかいうようなものではなく、それは確かに寂しい、古風な旋律であった。